

ペスタロッチー教育賞 受賞者紹介

学校法人愛育学園理事長

津守 眞 氏

津守眞氏は、1926年に東京都港区に生まれた。すでに戦況の悪化が直接悲劇として人々の生活を脅かしていた1945年に東京帝国大学文学部心理学科に入学する。ただ、実質的な勉強を始めることができたのは敗戦後、氏が兵役から戻ってきてからであった。幼児教育のゼミで聴いたコメニウスの話に大きな影響を受ける。コメニウスは戦争で失われた祖国の復興には幼児教育が重要であると考えた。大戦で荒れ果てた日本の復興も幼児教育が鍵を握るように思われた。

氏は在学中より社会福祉法人恩賜財団母子愛育会愛育研究所において、発達に遅れをもつ幼児の心理検査を担当する。卒業後同研究所研究員となり、1951年から二年間ミネソタ大学大学院に留学。帰国後お茶の水女子大学に採用され、女子高等師範学校以来の伝統をもつ附属幼稚園に通いながら常に実践を基礎とした発達心理学の研究と教育を進めた。以後「乳幼児精神発達診断法」を開発し、また多くの研究者を育てた。この間、実践に基づく研究を通して実証主義的研究法の限界に気づき、子どもと関わる時間を中心に置く人間主義的研究法を洗練させていった。

一方、引き続き愛育研究所の実践に参画し運営を支えた。発達に遅れをもつ幼児の特別保育室が戦争のために閉室していたのを1949年に氏が中心になって再開した。この特別保育室の保護者による強い要望から養護学校設立に尽力し、1955年に認可される。日本にはまだ養護学校がほとんどない頃のことである。研究者として氏は子どもの描画研究で国際的に注目され、また大学人としては学部長に選出されるなど、周囲から高い期待を寄せられていた。しかし、いよいよ愛育養護学校校長となることを請われ、1983年に58歳でお茶の水女子大学を退職した。それからの十二年間は全日を障碍（しょうがい）をもつ子どもと過ごすことに捧げた。その後社会福祉法人野菊寮理事長として知的

な障碍のある大人のケアに身を投じ、日本保育学会会長も務めている。氏は幼児の発達を研究する高名な研究者であると同時に、子どもとともにあろうとする一人の保育者である。その高潔な人柄と実践と思索によって、今なお子どもと親と保育者と研究者に、全幅の信頼を寄せられながら影響を与え続けている。

氏の最大の功績は、大人の観点から捉えられたニーズを子どもに与えるのではなく、あくまで子どもと一緒に過ごしながらか子どもから発せられる興味と要求に応えることを保育の原則として立ち立て、この原則から研究と保育が非分離なものであることを自らの実践と省察を通じて説得力をもって示したことにある。しばしば、目の前にいる子ども自身が見えず、大人の枠組みに合わせて教育しようとするあまり、子どもの自信も生きる楽しみも奪いがちな現代社会に対して、氏の活動は子どもの側に踏みとどまろうとすることの大切さを今なおわれわれに教えてくれているのである。

氏の以上の活動は、ペスタロッチーの実践を思い起こさせる。ペスタロッチーは戦争で孤児となった子どもを集めシュタツの地に学校を開いた。52歳のときである。その日々の実践を省察してまとめた『シュタツ便り』は人間主義的教育方法の研究書であり、今日に至るまで教育実践者に指針を与えるテキストであり続けている。一日のすべてを子どもと過ごし、その省察を通して実践者のための、そして何より子どものための理論がつくられた。この意味で氏を日本のペスタロッチーと呼んで誤りではなかろう。津守眞氏の長年にわたる多大な功績に対し、第15回ペスタロッチー教育賞を贈呈し、高く顕彰したい。

（「障碍（しょうがい）」という言葉について、氏は以前の用法を反省して次のように言う。「障害の害は、害毒の『害』である。この子どもたちは、何も害毒を流していない。これに気が付いたとき、私は害という字が使えなくなった。『碍』は、妨げの石という意味である。目から石を取り除けば障碍ではなくなる。」（『保育者の地平—私的体験から普遍に向けて—』「初版第四刷の付」、ii頁）